

氏 名	さくら い さと み 櫻 井 智 美
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 200 号
学位授与の日付	平 成 14 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 歴 史 文 化 学 専 攻
学位論文題目	元代士人の政治活動 ——集賢院・儒学提挙司をととして——

論文調査委員	(主 査) 教 授 杉 山 正 明	教 授 夫 馬 進	助教授 中 砂 明 徳
--------	----------------------	-----------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、元代に生きた知識人たちが、どのような経過で、どのような背景のもと、政治に参加していったのかということ、つまり、モンゴルを中心とする政権と士人とのつながり方を明らかにする目的から、4章だてで検討を行った。これまで、元代の士人・知識人を対象とした研究には、科挙の問題や儒戸の問題、またはさまざまな学校や書院に関する歴史的考察が存在していた。しかし、彼らと政権の関わりについて考えようとする、研究を行う側が属する時代や環境の影響を受けて、征服王朝とその下での漢人問題というテーマがことさらに設定されたり、或いは、近世以降の諸王朝と比較して科挙の占める比重が少ない特殊な時代として、知識人の不遇さが強調されたりする傾向があった。そこで、論者は、元代の官制史の一環として、士人が政権とどのように結びつくのか、それにはどのような組織・機関が如何に関わっていたのかということ、これまでとは違った角度から明らかにしようと考えた。

検討に先立ち、「前言」において、1980年代以降のモンゴル時代史研究や元代史研究における、史料状況の大きな変化についてふれた。旧来存在し研究に利用された史料と、最近発見され或いは利用が容易になった新出史料の接点を探るため、もう一度原典、すなわち「モノ」としての史料まで立ち返って徹底的に分析を行うことから始めることにしたのである。

第一章「趙孟頫の活動とその背景——江南儒人をめぐる問題提起」では、趙孟頫という元初から中期にかけて活躍した人物をとり上げる。これまで、絵画や文学作品で有名な元代士人・知識人については、彼らの残した作品を対象に研究されることが一般的だった。そのため、趙孟頫のような高官にのぼった人物でさえ、その官僚としての活動やその背景については、仕官の一時期を除いて研究の対象とならなかった。「モノ」は豊富に存在しながら、それを利用した政治活動の追究は、あまり行われてこなかったのである。そこで、趙孟頫を士人の類型としてとりあげ、官僚としての活動やその背景についてさぐるため、最初に、彼の『松雪齋文集』を詳細に分析した。まず、文集出版の経緯について考え、その出版の様子が政権とは離れたところでなされたことに注目した。また、文集所載の文章から趙孟頫と交流のあった人物をリスト化して集計し、その交流の特徴について、場所・身分などいくつかの側面から論じ、政治における「南人」の位置づけをし、併せて、元代の士人がどのような人的つながりを持ったのか、一つの例示を行った。次に、趙孟頫の佚文及び彼が書写したものを集成する目的で、特に彼が撰者・書者・篆額者として関わる石刻を集成し、これまでの諸研究と併せて彼が関与した資料の全貌を概観できるようにした。そして、立碑場所や時間など全体の傾向を分析し、碑を書くという行為の意味づけを行い、趙孟頫が政権に近づいていく様子を眺望した。以上をふまえて、政権との関わりという観点から彼の生涯を検証し、書画家としての局地的名声よりも、むしろ、宋の宗室の子孫であったことこそが、元の最初期において政権をして彼を必要とせしめた所以であったことを指摘し、また、のちには彼の書画家としての名声や価値が政治的立場によって補強されたことを明らかにした。

第二章「元代集賢院の設立」から第四章「元代の儒学提挙司——兼論宋金の学校管理」までは、第一章でその職掌の全容解明の必要性を提起した、集賢院と儒学提挙司についての検討である。第二章「元代集賢院の設立」では、集賢院が唐代か

ら元代まで存在した衙門であったが、その規定される職務内容は時代とともに大きく変化したことに注目する。まず、元代の集賢院について基本的な事項を確認するため、至元22（1285）年の集賢院独立までの道程を詳細に論じた。その中で、至元初期に集賢院官となった人物たちの果たした教育や暦学・医学方面の役割がそのごの集賢院の性格に影響を与えたことを指摘した。次に、集賢院が持つ機能の多様性について考察を行った。これまでの研究では、道教とのつながりがことさらに強調されてきたあまり、それ以外の側面が見落とされてきた感があった。そこで、道教や教育の側面について再検討し、集賢院が任用に深く関わっていたことを論証した。これらの多様な仕事のバランスを考え、集賢院は、設立の時点から、任用や教育という面で政権と士人をつなぐ目的を以て設けられた機関であったことを指摘した。集賢院は、そのごも、道教とのかわりや、科挙が実施されない中での教育監督など、時代に特徴的ないくつかの要因を反映して、複合的な職務を遂行していく。そして、それらが融合する中で、翰林院とは異なる新しい存在として、或いは、仏教や道教勢力などを取り込んだ集団として、医学・陰陽学をも含めた全面的な教育、及び人材の登用を統括する役割を果たしていった。

第三章「アフマッド暗殺事件と司徒府の設立——元初文教行政組織の改編」では、第二章で論じた集賢院のまさに草創期にあたる至元20年頃、「文章の官」に関わる諸組織が翰林院を中心に改編されていく様子を、その遠因ともなった当時の政治の流れとあわせて明らかにした。まず、『秘書監志』所載の司徒府関連の文章について、詳細な註釈を行った。それによれば、コルゴスンという人物を長官として、翰林院を中心とする集賢院・会同館・秘書監・太史院・司天台など典籍などに関わる諸衙門が統合された。その背景を探った結果、政治史の側面では、ムスリム官僚であったアフマッドの暗殺事件にコルゴスンが大きな役割を果たしたこと、そして、彼の権力の背景にあった司徒府という機関もまた、アフマッド権力下にあった中書省と伍するものとして組織されていた様子が浮かび上がった。アフマッドの暗殺事件は制度史的に見ても、クビライ時期に中国名称の衙門が整備されていく中での大きなできごとであったといえる。

第四章「元代の儒学提举司——兼論宋金の学校管理」では、第一章でその重要性を指摘した儒学提举司について詳細に論じた。まず、第一節では、儒学提举司が設立されるまでの地方学校の管理について、宋代まで遡ってその起源を論じ、北宋・南宋・金代における組織の概要を述べた。そして、元代の儒学提举司は、宋代の監察官たる提举学事司の性格を継承しながら、一面で元代江南の状況を反映した独自の衙門に成長したもので、また、それが「文章の官」としては唯一地方常駐の機関であったことを指摘した。同時に、北宋から金、モンゴル初期の華北へと伝えられた制度と、南宋経由で元代の江南に伝えられた制度に、大きな違いが出てきたことを例示することにもなった。第二節では、儒学提举・副提举に就任した人物を洗い出し、彼らのほとんどが地元の出身者であり、そのような任用方法は、特に江南の行省（行政）官としては例外的であったことを明確にした。そして、その方法が採られた理由を考察し、地方における士人の優遇措置だとする見方や、儒人集団を統括する組織の創出とする見方などを提示した。第三節では、儒学提举司の職務について、時期や内容を考慮しつついくつかの側面から論じた。まず、一般的に、儒学提举が、学校書院の管理、人材の推薦、儒人の管理、祭祀等に対する学校の出納管理、そして、公的出版におけるそのとりまとめなどを行うことを具体的に論証した。ついで、元初の儒学提举司が儒戸の選別のために、かつ、儒学を優遇するシンボリックな存在として設けられたことを指摘した。一方、注目される科挙とのつながりについても言及した。このようないくつかの面を勘案すると、それらすべての役目が、地方における教育・文化を総括する業務として位置づけることができた。つまり、儒学提举司は、それらすべてを監督する役目を持つ監察系統とつながりながら、地方において重要な役割を果たしたことが明らかになった。また、別の角度から見れば、集賢院をトップとした教育機構、行政衙門としての行省、そして、監察機関としての肅政廉訪司どれとも直接的につながる、士人にとっては便利な政治への窓口であったことがわかった。そして最後に、江浙行省の儒学提举司がその役所のある杭州において、建設や出版など盛んな文化活動を繰り広げていった様子を述べ、元末に華やかさを増す江南の文化が政治とつながる一側面を描写した。

各章の考察をととして、政治の中核にいる訳ではないが、しかし、政治とは切り離せない立場にあった士人たちの政治参加の様相が、本稿の考察を通じて浮かび上がった。趙孟頫や、彼が所属した集賢院や儒学提举司などの衙門は、中央と地方において、それぞれ教育文化活動の元締めとしての立場にたち、政権と士人をつなぐパイプ役を果たしていたのであった。

論文審査の結果の要旨

西暦13・14世紀は、モンゴル帝国がユーラシアの大半を領有し、ユーラシアと北アフリカをゆるやかながらもひとつにむすびつけた世界史上で画期となる時代であった。モンゴル帝国とその時代についての研究の歩みは、ある意味では、その後の歴史の分だけあるともいえるが、近代学術としてのそれはほぼ2世紀にわたり、アジア史研究全体のなかで、じつは屈指にぶ厚い研究の蓄積を有している。近年、とくに日本において、「モンゴル時代」という発想のもと、東西の多言語文献史料を搜羅したかたちでの研究展開がなされ、従来の歴史像を大きく塗り変えつつある。

人類史上で最大の領域を形成したモンゴル帝国のなかでも、中華地域については、帝国全体の宗主国となる大元ウルス（中華風の通称では元朝）が直接に領有したところであり、モンゴルと中華とを両軸に据えたうえでのさまざまな研究が試みられてきた。総じて、久しい間、モンゴル支配を否定的にとらえる見方が優越してきたが、これについてもやはり、とくに近年の日本を先導役として欧米・中国などでもいちじるしい変化が見られる。

その要因のひとつは、モンゴル帝国の全般にわたって、確実に客観的な史料研究がある程度すすみはじめた結果、ドラスチックな歴史評価の転換がおこり、それが中華地域についても及んだこと、もうひとつは中華方面での主要な文献史料となる漢文文献に関して、中華人民共和国が改革・開放政策に転じて以後、典籍や碑刻などを中心に数多くの新史料が出現し、史料状況が根本から変化したこと、この2点が挙げられる。それらの直接の結果として、日本においては、いわゆる元代史の研究が急速に活発となり、とりわけ若年層の研究者の増加が目につく。本論文もまた、そうした潮流のなかにあるといっている。

四章からなる本論文は、モンゴル治下に生きた漢族士大夫層の政治参加をメイン・テーマに、大元ウルス政権とのかかわりあいの諸相を描こうとする。

第一章「趙孟頫の活動とその背景——江南儒人をめぐる問題提起」は、南宋皇室の一族でありながら、「夷狄」のモンゴルに仕えたとして、従来ややもすれば無節操漢の典型のようにいわれがちであった趙孟頫を取りあげ、その官僚としての履歴や史上名高い書家・画家・文章家としての多面の活動、さらには交遊関係のひろがりなどを分析する。そのための基礎史料として、彼の文集『松雪齋文集』に登場する人物の顔触れを頻度別に整理した一覧表をはじめ、趙孟頫が撰者・書者・篆額者として関与した255碑を列挙する。とくに後者の関係碑刻の総覧は、膨大な石刻書や典籍から抽出・作成したものであり、本章の直接の目的とは別に、趙孟頫の文化活動を見渡すうえできわめて役に立つ。書道・絵画・美術史研究者にも有益な点が多いだろう。南宋皇室の末流にすぎなかった趙孟頫は、彼を優遇することで旧南宋治下の官僚・知識人をきちんと所遇することを示そうとするモンゴル政権側の「用賢策」のシンボルであり、書家・画家・撰文者としての名声も、いわゆる趙孟頫体の字体による大量の政府出版物が示すように、モンゴル政権によって作られた一種の文化スターであったといえる。本章全体に、やや考証面での詰め甘さが見られるものの、十分に意味のある貢献度の高い成果といえるだろう。

第二章「元代集賢院の設立」と第四章「元代の儒学提挙司——兼論宋金の学校管理」では、第一章で分析した趙孟頫が歴任した官のうち、「文章の官」を擁し、漢族士大夫と政権をつなぐ役割をはたしたと論者が考えるふたつの衙門として、集賢院と儒学提挙司を取りあげる。

まず中央衙門としての集賢院については、名称そのものは唐代から存在したものの、その中身は元代独自のものであったこと、教育や暦学・医学をふくめ多面性・複合性の高い官衙であったことを述べる。ただし、従来の研究において道教とのつながりが強調されてきたことを攻撃しようとするあまり、官僚の任用や教育機関としての側面を重視するが、じつは道教関係者と教育・学校施設とのかかわりは華北におけるモンゴル支配の初期に淵源するものであり、その点、修正を要する。第四章では、これまでほとんど論及されることのなかった儒学提挙司について、宋・金時代の類似の地方組織に溯って検討し、宋代の監察官たる提挙学事司の性格を継承しながら、その一方で元代江南における状況を反映した独自の衙門に成長したこと、また「文章の官」としては唯一の地方常駐機関であったことを述べる。さらに、学校・書院の管理、人材の推薦、儒人・儒戸の管理・選別、公的出版のとりまとめ、科挙とのかかわりなどを検討し、儒学提挙司が地方における教育・文化の総括機関であり、漢族士大夫にとっては便利な政治への窓口であったとする。無難な論述だが、一面ではじめから予想された予定調和めいた議論でもあり、今後はより具体的な局面について、さらに膨大な関連史料の山のなかへわけ入ることが

期待されよう。

なお、第3章「アフマッド暗殺事件と司徒府の設立——元初文教行政組織の改編」については、史上に名高い事件に挑んだ意欲はわかるが、読解・分析・論証ともに、いまだしの感は否めない。

本論文の全体を通じて、新しい史料状況に対応した基礎データの抽出・収集作業とその努力が印象深い。史料への真摯な取り組みは、歴史学研究の基礎でも本旨でもある。だが、その一方、近年の元代史研究にやや目につくこととして、木を見て森を見ずどころか、枝葉を見て木を見ない傾向がある。本論文にもそのきらいがなくはないが、今後の研究活動のなかで視野がより開けゆくことを期待したい。また、研究をするうえで最低限は必要となるモンゴル語などの知識・素養は、きちんと身につけることがもとめられる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値のあるものと認められる。なお、2002年1月8日に調査委員3名が、論文とそれに関連した事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。